

蒲生干潟における植物の再生過程(1)ヨシの再生

概要

4月13日ならびに5月12日に蒲生干潟の主要な植物群落構成種であったヨシについて調査を行った。その結果、地上部は津波により大きな被害を受け跡形もない状態であったが、地下部の生存を確認することができた。かつて最も広いヨシ原が存在していた地点を中心にライントランセクト法により調査を行った。その結果を報告する。

調査方法

4月13日の調査で蒲生干潟周辺域を踏査した。全体像をつかむとともに調査地を決定した。5月13日にライントランセクト法で、かつてヨシ原があった地点を調査した。

ラインはヨシが分布している範囲を十分に含むことができるように設置した。調査枠は1m×1mで、汽水域に平行方向に40m、5m間隔で8個設置した。垂直方向12mで、2m間隔で6個設置した。調査項目は自然高毎(10cm階級毎)の個体数である。地下部で連結されていることが想像されるが、地上部で分けた。平行ラインのplot.4と垂直ラインのplot.2は同一の調査枠である。

現地で個体数を確認すると共に、全ての調査枠の鉛直方向から写真を撮影した。Fig.1はplot番号5の調査枠を示したものである。



Fig.1 調査枠と再生途中のヨシ

結果

Table.1ならびに2が調査結果を示している。汽水域に平行なライン上の1平方mあたりの平均個体数は18本となり、最も密度の高いplotでは1平方mあたり25本のヨシを見出すことができた。垂直方向のライン上では汀線から4mのplotで最大の値を示し、1平方mあたり18本のヨシを見出すことができた。

Table.1 汽水域に平行なラインのヨシ分布

plot	1	2	3	4	5	6	7	8
自然高cm	(個体数/1m×1m)							
50~60		3					2	
40~50	1	2		2	5		2	
30~40	3	6	1	6	4		0	3
20~30	4	4	3	4	2	3	8	7
10~20	8	4	3	4	3	8	3	4
0~10	3	6	2	2	4	8	3	4
総個体数	19	25	9	18	18	19	18	18

Table.2 汽水域に垂直なラインのヨシ分布

plot	1	2	3	4	5	6
自然高cm	(個体数/1m×1m)					
50~60						
40~50		1	2	2		
30~40	0	6	4	1		
20~30	3	4	5	1	4	1
10~20	0	4	1	2	2	0
0~10	0	2	0	0	1	5
総個体数	4	18	12	4	7	6

考察

以前の蒲生干潟に見られたような見事なヨシ原は津波によって消失してしまったが、上記に示したように、ヨシ原再生の可能性を認めることができる。調査のたびに地形が変化しているため同一地点の確認が難しい点はあるが、可能な限り追跡調査を行い、蒲生干潟の保全のための資料を収集したい。

(長島康雄)